

## デュルケムにおける宗教と自殺

寺 林 脩

この発表では、デュルケムの宗教論や自殺論、あるいは宗教と自殺の関係についての論述に対する、実証的または方法論上の問題点を考察するのではない。ここでは、デュルケムにとって宗教と自殺は何であったかを、『社会分業論』と『自殺論』を中心に考察したい。

デュルケムが当時の社会から受けた衝撃は自殺率の急増であり、逆に、彼が当時の社会に与えた衝撃は彼の宗教の研究であったという、リヒトハイムの指摘は、暗示的ながら、デュルケムの思想と社会学理論の性格を一言で表現した感がある。

デュルケムにとって宗教と自殺は、彼の代表的な社会学的テーマであるが、さらに、彼の思想と理論をつなぐ基調としてとらえることができる。彼の著作を読む時に感じる知的興奮やとまどいの感情、また、その魅力と難解さの原因は、18世紀来の西欧の諸思想を含む、実に複合的な思想の全体像や、その総合的な発想や、それらを前提とする多様な社会学的分析視角などにあると思われる。したがって、この発表のそもそもの意図は、デュルケムの思想と理論を見通すひとつの読み方を求めたものである。つまり、彼の宗教と自殺に対する関心は、思想的にも社会学的にも鋭い緊張関係にあったのではないか。さらには、宗教と自殺を両極とする道徳性が、彼の思想と理論を展開させる回転軸になっていたのではないかということである。いいかえれば、宗教と自殺という視座には、彼の思想と理論、および両者の関係についてのアプローチを容易ならしめる利点があるのではないかということである。

さて、アルパートによれば、デュルケムの研究者としての立脚点は、既成の哲学的諸学説やその風潮に対する満たされぬ思いと、第三共和制の道徳的統一に貢献したいとする願いにあった。彼が選んだ実証科学としての社会学こそ、また、そこでの科学的合理主義による現実認識こそ、彼の思いと願いをかなえる手段であった。それは集合的観念作用の諸法則の確定を課題とする、社会集合心理学であり、かつまた、制度の科学であった。したがって、彼の学問的課題は必然的に、まずは社会的事実としての道徳的事実の社会科学的究明から、道徳科学の確立に向かう。そして、当初のテーマである個人の自律化と社会的連帯という表面上の二律背反の

解決を求めて、道徳的統合の理想的効果を論じる。それを論拠にして、実践への提唱へと発展する。このような社会の構造—機能分析による社会的欲求や要件として、価値判断をも可能ならしめる合理主義的実証主義のユニークな方法論と、その前提である生物学的類推と精神科学的類推による、自然性（自然的な固有の法則と原理に従う特性）と社会性（構成諸要素の化合や統一による心的実在性）を兼ねそなえた社会有機体的社会観とは、彼の希望を達成させるべき最大の戦略となる。

客観的事実性をそなえた社会に対する実証的研究を徹底させることこそ、そこでの経験科学的知見こそ、倫理的体系の構築を現実的なものとするという基本姿勢は、デュルケムにとって終生変わらぬものであった。めざすは、近代社会の基本的な理念である「人格の崇拝」、「個人の尊厳」、彼においては道徳的個人主義とも表現される個人的人格の価値の実現であり、それを可能ならしめる集合的理想の全体としての、道徳的—宗教的実在である社会の実現であった。その否定的姿こそ当時の社会であり、自殺率の急増であった。

デュルケムの知的遍歴や初期の論文から、たとえば、シェッフレやワーグナー、シュモラー、ヴント、テンニエス等の研究から、彼の後の思想や理論の展開を先取りすることもできるが、パーソンズがつとに指摘したように、『社会分業論』に基本的な諸問題は出揃う。続いて、デュルケムは自らの実証主義的方法論の確立を意図した、『社会学的方法の規準』を経て、社会病理学的テーマとして、自殺の社会学に取り組む。ラカプラやルークスも強調するように、デュルケムにとって社会病理学は重要な分野である。社会の存立に関わる故に自殺の研究は急を要した。並行して、宗教を講義題目に取りあげ、後の書簡で述懐したように、1895年から宗教の本格的な研究を始めている。この1890年代半ばにおいて、彼の宗教と自殺に対する関心は相互に強めあい、鋭い緊張関係にあったことは充分にうかがえる。自殺率の急増という現実社会の病理の認識は、道徳的規律の基盤を求める関心を深めさせ、その源としての宗教の発生論的観点へと彼を導いたと思われる。

言うまでもなく、デュルケムは研究活動の当初から、宗教に強い関心を示している。道徳的、哲学的、科学的、法的観念等のすべての発生起源は宗教にある。社会は本質的に宗教的な共同体である。社会に統一をもたらす源泉は宗教である。宗教こそ社会的統合力そのものである。以上のように宗教をとらえる彼の基本的立場は、学生時代以来のクーランジュやドイツ留学時のヴント等から得ていただろう。その社会的機能を社会構造と関わらせて原理的に示されるのは『社会分業論』においてである。

デュルケムは述べている。「すべての宗教的感情と観念が等しく表明している唯一の特性は、集団生活をしている人々に共通であり、かなり高い程度の強度を平均してもつことである。強力な確信が人々の同一共同態によって分有されている時、それが不可避免的に宗教的特性を帯びることは実際に確かな事実である。その確信は意識に本来宗教的な信念と同じ畏敬の念を呼び

寺林：デュルケムにおける宗教と自殺

起こさせる。そこで、宗教がまた等しく集合意識の中核部分に対応していることは確実である。」と。

つまり、同質的で類似的な諸環節の体系からなり、個人意識が集合意識のなかに埋没している機械的連帯の支配的な伝統的社会では、共同的一類似的な集合意識が道徳的義務の体系を形成している。そして、社会的集合力である宗教を起源としている習俗や慣習や法が、具体的一現実的な道徳的拘束力を発揮して社会を統合している。他方、異質な諸機能の体系である分業によって発展する、組織的な有機的連帯が優越する近代社会では、協同的分業による機能的相互依存関係が、道徳的義務の体系を形成して社会を統合している。この文脈において、宗教は伝統的社会の道徳的拘束力である集合意識の中核にあるが、社会的容積と道徳的密度の増大による分業化、つまりは近代化によって、集合意識は社会の規模の拡大と機能の分化に対応できずに後退する。それに並行して、宗教の社会的統合の役割の衰退を論じている。

ただ、機械的連帯から有機的連帯への推移につれて、集合意識の統一性や支配性など、その重要度は減少するが、分業の発展する近代社会において全く消滅するのではない。たとえば、契約関係の背後でそれを支える道徳的拘束力として存在している。契約関係が複雑化し増加しても、その遂行を監視する規範が前提にある。それは一定の成文法として存在している。社会的集合力のひとつの現われである集合的存在として、集合意識は社会と個人の相互内在性である「われわれ」意識の対象である共同態を前提としている。つまり、近代社会も道徳的秩序の上に存在している。デュルケムにとって、近代社会の集合意識は、最も抽象的な普遍的一道徳的関与となる「人格の崇拜」という、集合的一道徳的人格ともいふべき理想的規範である。それは分業の発展にともなう個人の原子化の対応物になるだろうと指摘している。そこに、集団本位的な集合意識から個人本位的な集合意識への推移が示されていた。しかし、理想的規範のみでは伝統的社会における集合意識の役割は果せず、なによりも分業による機能的相互依存に内在的な道徳性が強調されていた。それは間接的な社会への結合であるが、協同そのもののうちに積極的な道徳的価値、たとえば社会正義などを実現させるものがあると。

確かに、社会的分化や個人主義化を一般的傾向とする近代社会において、宗教の伝統的権威による社会的統合はなしえない。だが、むしろこの認識から、社会的集合力の理想的実現を求めて、ギデンスも強調するように、デュルケムは近代社会における宗教あるいは宗教的なものを、社会構造の根底においてとらえかえす視野を開く。伝統的社会と近代社会の社会的統合における断絶性と連続性の問題が、集合意識や権威構造や宗教の問題の再考を促したと思われる。1890年代後半の思想と理論の展開の原因はそこにあるだろう。

ともかくも、『社会分業論』までのデュルケムの宗教に対する見解は次の通りである。宗教は社会の最も本質的なものの現れである。社会生活の連帯や統合をなす習俗や慣習や法の起源は宗教であるから、宗教の特性は社会的統合の機能である。宗教的感情は個人が一部をなす集合的社会に対する帰属感情であり、その絶対的な超越性に対する畏敬の感情である。個人的存在

は本源的存在である社会から派生する。宗教の定義は神の観念によらず、集合的社会の統合性によらねばならない。宗教は集合的現象であるから、宗教的感情や信念以上に儀礼が重視されねばならない。

ここで注目しておくべきことは、社会的集合力の集合的表現についてである。それは広くは集合的諸観念や意識や慣行であるが、その中核をなすのが宗教的信念や儀礼であるということである。あらゆる集合意識や社会諸制度はそこから派生したものである。また、社会的集合力の合一あるいは交流の状態ともいべき集合的融合は、罰則条項からなる禁止的法律の破棄によって引き起こされる反動的激情として例証されていた。つまり、禁止的法律（主に刑法）が保護している第一のものは、破壊されれば社会の全体的な統合を脅かしかねない、それ故に神聖でもある集合意識であり、その中核をなすのは宗教的感情であった。このように、社会的集合力はそうした反動によってとらえうる集合的エネルギーである。後の宗教論においては、集合的沸騰状態として社会集合力はその存在性と再生過程が明示される。

統合原理である社会的連帯が中心テーマである『社会分業論』において、社会の全体的統合を基本類型とする社会進化論的な構造変動と、有機的連帯の理想型の構成との論述のなかで、社会的集合力としての宗教の問題が伏線的な問題意識であったと思われる。社会全体によって共有されている諸観念は、共有され同意されるというところに権威を生み出し、その権威によって神聖化され超越化するというメカニズムも既に明らかであった。

自殺に対するデュルケムの関心も早く、かつ持続的である。1888年に「自殺と出生率」を発表し、また1890年にかけて自殺を講義題目に選んでいる。当初から、彼は自殺を社会的な病理とみている。先の論文では、自殺率と出生率の反比例関係に着目して、自殺率の増加原因を出生率低下による家族的感情の衰退に求めている。高出生率は密度の高い家族関係の存在を意味し、家族員の相互を生への連帯に結びつけていると。社会構造の変動から必然的な歴史的衰退傾向にある家族的感情は、その伝統的の原型として宗教的感情につながり、やはり『社会分業論』の伏線的なテーマであった。そしてそれはアノミー状況の克服策としての主たる構成理念となった。

さて、近代社会を道徳的価値体系の崩壊による危機状況としてとらえる、デュルケムのその現実認識は、伝統的な宗教的・道徳的規範が資本主義的産業化の進展とともに弱体化してきたにもかかわらず、それに代りうるものを作りあげるに至っていないことにある。有機的連帯を育む分業は、近代社会の統合の社会的基体として正常的であらねばならないものである。だが、現実社会ではむしろ例外である。多様な個人的人格を基礎とする分業の発展に対応するはずの、機能的相互依存による内在的な道徳的規制と、「人格の崇拝」に関わる全体的・統合的な規範との調和ある発展が、個人的人格の伸長と経済的富の増大にともなって生み出される功利的な個人主義の自己充足という無規制（アノミー）や、階級的な所有関係の支配などによっ

寺林：デュルケムにおける宗教と自殺

で、阻止されてしまっているのが原因である。その異常性や危機の状況は、デュルケムにおいて、つとに懸念されていた19世紀ヨーロッパの自殺率の急上昇に現われているという。まさに構造的危機の明らかな徴候であると。ここから、社会の道徳的連続性や規範的統一性という観点から宗教が、その著しい不連続性や異常性という観点から自殺が、彼の社会観により明確なイメージを与え、彼の社会学的認識により多様なアイデアを提供することになるのではないだろうか。

『自殺論』においてデュルケムは、社会的事実として、自殺（自殺率）の真の原因を個人的・心理的要因に求めず、社会的要因に求める。それは統計的資料に表われる自殺率の斉一性から予想される、同じく社会的事実である「自殺への集会的傾向性(自殺の潮流)」である。そこから、自殺（自殺の条件）の特徴を社会的環境に関わらせて、彼は宗教社会と自殺率の係に着目する。宗教の統合的機能の観点から、社会的連帯の一表現として、つまりは、社会的な規範的原理の本質的なものとして、既成宗教社会の拘束性（自殺の抑止力）を比較検討する。家族や政治社会と自殺率の係についての分析も、同じく社会的統合性や凝集性に注目する。そして、「自殺（自殺率）は社会集団の統合度に反比例して変化する」という命題をうちたてた。

ヒューズが指摘したように、デュルケムにとって、社会の決定的な特性は主観的性質にある。社会の一員であるという感情が人間存在にとってなによりも重要であった。『自殺論』のテーマは結局のところ、「社会的人間であることが諸個人の生を価値あるものとする」ということである。ここから、最も社会的なものこそ宗教であるデュルケムにとって、いかなる型の社会も、近代社会であれ、構造一機能的に宗教的体系に相当するものが必要であるという、社会構造の根底における認識を得ている。宗教的感情や信念のみによって自殺の抑止力が実効しないという彼の考察どおり、個々の集団の機能やそこから生じる感情そのものではなく、集団の、あるいは社会の構造そのものが連帯的統合的でなければならない。集団的目的に個人を方向づけることができるような構造をそなえていなければならない。個人をつつみこみ、必要な場合には個人を支える連帯の絆を提供できなければならない。

宗教的体系の必要性については、ニスベットやラカプラも強調するように、普遍的・永続的な生命体ともいふべき、コミュニタスとしての社会の本性における認識を前提としている。宗教的合一感情や一体感を母体とする、自由かつ平等な人間関係を自然的・具体的にもっている共同態こそコミュニタスであり、社会の本質的なあり方を示す理想である。社会を構成する諸成員の集会的観念や意識に左右される、それでいて独自の心的実在である社会的生命（『自殺論』では集会的生命）としての、デュルケムの社会像は、後に道徳教育論やプラグマチズム論のなかでより明確にされるが、『社会分業論』から『自殺論』での宗教と自殺についての論述に、ほぼ読みとれる。

伝統的社会においては、強固な道徳的一致が社会秩序の存続に必要である。したがって、自己犠牲や没個性を要求する集合意識が支配的で、それが諸成員の生を意味づけている。つまり、

愛他的集団本位主義や宿命主義が自殺の潮流（集合意識の不確定な世論的雰囲気）の主たるものであるが、しかし、利己的自己本位主義の潮流が存在しない訳ではない。個人的感覚や観念による個性を無にすることはできない。

近代社会においては、社会的分化や個人主義化によって自殺の潮流も多様なものになる。デュルケムは近代社会に特有な自殺類型として、自己本位的自殺（常軌を逸した個人化から生じる）とアノミー的自殺（欲望の無規制と挫折による）をあげている。歴史的必然である宗教的感情や家族的感情、また同業組合的感情の衰退や、ペシミズムやニヒリズム、アナーキズム、ミスティシズム等の思潮の流行によって、利己的自己本位主義やアノミーの潮流が形成されている。近代社会はその構造上、個人の自由や自律性に大きな価値がおかれているからである。もちろん、愛他的集団本位主義や宿命主義の潮流も存在しない訳ではない。

個人的感情と呼応し、個人に影響を与えやすい自殺の潮流は、いずれの社会においても集合的な意識の流れのなかに含まれている。自殺のない社会はない。いいかえれば、自殺は覚悟の上での死であるから、いずれの社会においても、なんらかの集合的規範や価値の内面化したものを程度の差こそあれ自発的に再現している訳である。集合意識は一般的に、「同じ社会の諸成員の平均に共通な諸信念や諸感情の総体」であって、明確な特性をもつ実在である。その集合意識と、より流動的な過程にある集合的傾向性（社会的潮流）とは、社会の構造的存立条件と対応し、結びつきながら並存している。その具体的—現実的なものは社会的諸制度であり、その抽象的—観念的なものは共有的意見や意向や概念である。社会的潮流の一部である自殺の潮流も、機能的には同様であり、伝統的社会においても近代社会においても、構造的存立条件、さらに社会的理想と深く関わっている。自殺(自殺率)の原因となるのは、自殺の潮流のあるものが過度に強度になって諸潮流のバランスが崩れるからである。もちろん、そのバランスは社会集団の状態やその道徳的構造に規定されてはいる。

デュルケムの自殺の潮流についての論述において、また既に述べた機械的連帯や有機的連帯、後に明確化される人間の二元性や、聖俗理論などの論述からも、いかなる社会も統合性と分散性の相矛盾する諸要素から成り立っているという観点が注目をひく。そして、相矛盾する諸要素の弁証法的発展を可能ならしめる、創造的な綜合力こそ社会の本性であり、社会的生命と呼ばれるゆえんのものである。彼のあげた4つの自殺の潮流を含む集合的傾向性は、社会的集合力、つまり社会的生命の動的な表現である。それへの対応として道徳的再統合のための実践を志向することができた。したがって、自殺(自殺率)の原因の根幹は、社会とその諸成員の相互交流による集合的エネルギーであるところの社会的生命が、変調あるいは弛緩や衰退したからである。社会が生々と活動していないところに自殺(自殺率)の究極の原因がある。近代社会の危機的状況の原因もそこにある。危機克服の実践目的は、社会的生命の本来の創造的綜合力を道徳的規制によって正常化することである。いいかえれば、社会的生命の自然性と社会性の本来の状態を回復させることである。デュルケムの社会理論はそうした方向に展開されていく。

デュルケムにおいて、社会を構成する諸成員の観念的結合から形成され、その結合のなかに生きている社会的生命こそは、宗教と自殺、(いいそえれば社会的ゆえに人間的でもある生の躍動と弛緩や硬直、極論すれば生と死)、それらを両極とする道徳的緊張関係のうえにたえず存在する。既に考察したように、社会的生命が静的存在性として姿を現わす時は、集合的心性や人格として、宗教的性格をもつ集合的存在として、社会的理想を示して「われわれ」感情のなかで生を価値づけている。社会的生命が動的存在性として姿を現わす時は、集合的融合の激情や沸騰として、生を実感させ、効果づけ、再創造している。社会的生命が動的表現性として姿を現わす時は、自殺の潮流のような集合的傾向性として、生の均衡を保ち、弁証法的発展の可能性を孕んでいる。また、社会的生命が静的表現性として姿を現わす時は、集合的な観念や慣行や制度として生を安定させている。以上のように、すべては社会的一道徳的環境として、生のあり方を個人外在的にも内在的にも規定している訳である。いずれも全体的には社会的生命の発現過程であり、本質的一本源的には宗教的である。1890年半ばの、デュルケムの宗教と自殺の論述から、彼の社会観はほぼ確立されている。

宗教の本質と本源的一原初的形態を求めて、未開社会を対象とする宗教の研究が本格化するのには、デュルケムにとって必然的であった。そして、近代社会においても社会が新しい信念や理想の表象の源泉であって、宗教あるいは宗教的なものが社会の統合力として社会を維持し再創造していくという仮説の、あるいは確信の、より確かな検証が期待されていた。トーテミズム論における集合意識の象徴的内容の源泉と、象徴を再創造する儀礼の制度的枠組の解明に、社会的生命である集合力のメカニズムが明示され、仮説の傍証を得ている。通歴史的な社会の道徳的連続性や規範的統一性に大きな示唆を与えたことにもなる。ただ、近代社会における宗教あるいは宗教的なものについて、デュルケムは十分に明らかにしてはいない。

「創造される可能性のある唯一の宗教は、プロテスタンティズムのうちの最も自由な宗派より、なお大幅に内省の権利や個人的創意を容れるような宗教である。」「すべてが人間であるということ以外に、もはや共通の要素がなに一つ共有されないような時期がやってくる。……衆目は一致して人格に一種異常な価値を与えずにはいない。こうして人格はあらゆる人間的目的を超えて一つの宗教的性質を帯びてくる。」「人間性の尊敬は人間が同時に信仰者であり、神である宗教である。」「人間の崇拜は理性の自律をその第一の教義とし、自由な探究の信条をその第一の儀礼とする。」等々の表現にとどまる。

社会的生命を創造し、維持し、再創造するのが宗教であり、その弛緩や硬直や衰退が自殺であることから、デュルケムにおいて両者は対概念的な性格をもっていた。『自殺論』の類型論からすると、伝統的社会における宗教の社会的統合力に対して、集団本位的自殺(過度の社会的統合による)や宿命自殺(拘束的規範による徹底的抑圧から生じる)は、ある程度を超えると社会解体的であって宗教と対極的である。近代社会の自己本位的自殺(常軌を逸した個人化による)やアノミー的自殺(欲望の無規制と挫折から生じる)は、宗教あるいは宗教的な社会的

統合力の不在によって、社会の道徳的不連続性を際立たせている。社会的—集合的傾向性として、ここでも宗教と自殺は対極的である。

ところで、社会的生命を担い育くむ、またそれによって支えられ育くまれる社会諸成員の、つまり人間の二元性がデュルケムの社会観と表裏一体の人間観である。それは社会的存在と個人的存在との二元的人間観である。前者は、個人が所属し構成している社会を表象する故に非経験的要素をも含む、集合的感情や観念の体系を内在化させているところの道徳的存在である。後者は、全く個人的—経験的生活にのみ関わる精神状態から成り立っている利己的存在である。前者は「人格の崇拜」を基本理念とする道徳的個人主義に、後者は利己的個人主義に概念化できる。いずれも人間と社会の存立条件である。いずれも社会の所産である。両者の弁証法的関係に、人間と社会のそれぞれの活動的—発展的エネルギーがある。

デュルケムは前者の「人格の崇拜」を基本理念とする道徳的個人主義に、近代社会の宗教的理想的なものを認め、社会的統合力の主体性を求める。彼は一連の道徳科学において、それが社会の構造—機能的要件であるという論証を展開する。したがって、近代社会における人間は社会に対する求心性と遠心性を増大させる状況にある訳である。職業集団論や道徳教育論、社会連帯的社会主義論等で社会的統合への方策が論じられる。アノミー状況の克服が念頭にあった。それ以上に、道徳的な社会的存在としての人間にとって、最も確かな社会的生命の静的存在である集合的人格、つまりは集合的理想としての道徳的共同態への帰属と帰依に、デュルケムは宗教と自殺という視座から社会と人間の救済をみていたのではないか。共同態との合一にこそ、社会を統合化する道徳的原理の源泉が求められていたからである。

デュルケムの社会観や人間観に、彼の社会学的分析視角が規定されるのは当然である。発生論的観点や発展論的観点、社会形態学的観点や社会生理学的観点、構造—機能論的観点や社会統合論的観点、そしてなによりも実践的価値評価的観点など。ここで論じる余裕はないが、宗教と自殺という視座から、デュルケムの思想と理論を縦横に切りひらき、全体を見通す視野が獲得できるのではないだろうか。

以上は、57年10月10日、神戸大学における第55回日本社会学会大会にて研究発表したものである。